

神様が行方不明 —漠然とした不安と闘う大学職員のよりどころ

リサーチ・イニシアティブセンター 田中 恵美

2016年に日本で公開された「pk」というインド映画がある。インドに降り立った宇宙人（通称pk）が、故郷との唯一の交通手段である宇宙船のリモコンを失う。リモコンを取り戻したい彼は、人間の願いを叶え、痛みから救ってくれるという「神様」を探すことにする。その過程で「宗教」というものに出会うが、ある宗教では、儀式の際に葡萄酒を飲むが、他の宗教では飲酒を禁じられ、ある宗教では偶像に祈るが、他の宗教では許されず、彼は途方に暮れる一。

「宗教」というのは、とかく話題になりにくい。なんとなく、気軽に話題にできない気持ちになる。下手に話題にして怒られちゃったり、勧誘されちゃっても困るし…としたりもする。それから、なんといってもなんとなく「怖い」のだ。本学はキリスト教に基づく教育を行っており、学内では、そのような壁は、比較的低いのではないかと思うが、それでも個人的な思いを述べる、というのは、なんとなくはばかれる。…なんとなく。ここまでで「なんとなく」と4回も書いている。

この漠然とした不安。グローバル化の波にさらされている私たち職員の気持ちに似ていないか。「グローバル化」「グローバル人材」。「なんとなく怖い」。

【Salon de Glocal】は、「なんとなく怖い」を払しょくするための企画である。宗教やグローバル化だけでなく、様々なトピックを取り上げ、「グローバル」というキーワードで理解を深める取り組みである。学内の関連分野の複数の教員を迎え、マッチングすることで教職員の相互理解と学内リソースの把握を目的としている。「サロン」は、それぞれの立場にとらわれず、誤解されることを（過度に）恐れずに自由にアイデアや意見を述べる場。運営チームには、教員のメンバーとして西原廉太先生／文学部キリスト教学科教授にも参加していただき、公開講演会ではテーマにしづらい賛否の分かれる問題や身近な問題も取り上げ、会場の雰囲気づくりも含め、教員職員双方の参加者が積極的に参加できるよう工夫している。

第1回【Salon de Glocal】「宗教をグローバルにひも解く～立教大学と宗教」は、2016年10月12日（水）に阿部善彦先生／文学部キリスト教学科准教授、門田岳久先生／観光学部交流文化学科准教授、今井信治先生／本学兼任講師をスピーカーに迎え、開催した。当日の様子を再現してみよう。

*

Q そもそも「グローバル」とはどのようなことを指すのでしょうか。

A (阿部先生) グローバルはグローバルとローカルの合成語です。世界を画一的基準によって世界を統合しようという動きをグローバルと呼ぶならば、それに対して地域・文化ごとの固有性を維持しようとする動きのことを指します。ある地域・文化を、多文化共生が可能となるようなかたちで、様々な人間に開いてゆくというポジティブな意味が含まれています。

また、地域を様々な人々に開かれたものにするには、公共的空間として開いてゆくこととして考えられます。

しかし日本人の抱く「公共性」のイメージが貧弱であることが指摘されています。「公」のために「私」が犠牲となるというイメージを多くの人が持っているとするれば、それは変えてゆかねばなりません。「公」とは「私」を活かすものでなければならぬからです。この考え方が本当の意味でのグローバルを実現するために必要となります。それは「活私開公」と言い表されます。これがグローバルの理想を示す標語となっています。

Q 門田先生のご研究テーマ「宗教ツーリズム」とはどのような分野なのでしょう。[グローバル]という視点ではどのような意味をもつのでしょうか。

A (門田先生) 宗教に関しては、ローカルな聖地や儀礼に目を向ける中から、グローバルな文化政策、たとえば世界遺産を考えることに繋がっていきます。通常宗教は「心」の問題、すなわち「信じるもの」として捉えられています。しかし文化人類学から見るとそれだけでなく、「行為」の問題、すなわち「行うもの」という側面も重要な要素であると考えられます。分かりやすく言えば、通過儀礼や年中行事、冠婚葬祭などは、必ずしも信仰に基づくものではありませんが、多くの人は慣習としてこれを実践しています。日常にあふれる慣習や儀礼という側面から考えると、日本は宗教的な社会であったと言えます。

近年、四国遍路が再びブームとなっています。これも地域によっては若者が大人になるための通過儀礼として行われていました。現在では旅行産業と結びつき交通や宿泊とパッケージ化されたり、出版社からガイドブックが多く出たりし、スタイルが画

R-CAP Project
Salon de Global
宗教をグローバルに
ひも解く
 2016年
10月12日(水)
18:30~20:30
 立教大学 池袋キャンパス
16号館第1会議室
 対象：本学教職員
 事前申込はこちらから
<http://www.r-cap.or.jp/form/salondeglobal>
 池袋キャンパス
 立教大学
 アットホームなサロンで
 身近なギモンやアイデアを
 共有しませんか。
 話題提供者
 1 阿部善彦先生 (文学部キリスト教学科准教授)
 グローバルと宗教の関係を見る三つの視点—幸福、公共性、制度、包摂的宗教—
 2 門田 Hisao 先生 (観光学部交流文化学科准教授)
 現代宗教ツーリズム入門：信仰と観光の二論を越えて
 3 今井信治先生 (本学兼任講師)
 アニメ・コンテンツが培うグローバルシティ
 秋文礼拝堂を中心に—アニメ・聖地巡礼・拡張現実—
 コメンテーター
 西原廉太先生 (文学部キリスト教学科教授)
 お問合せ先
 Salon de Global 運営チーム
 sdc2016@rikyo.ac.jp
 内線 406 (担当：田中)

一化されつつあります。私は博士論文の一環で巡礼ツアーの参与観察を行ったのですが、参加者たちは本格的な「苦行」は避けたいけれども単なる旅行として終えるのもまた避けたいと思っているので、旅行社側は宗教的な要素を全面に出し観光的な要素を微妙に絡ませながら、巡礼と観光を両立させるモデルをうまく作っています。また従来観光資源でない場所や要素、例えば民間信仰の空間や先住民の聖地などにも観光客が集まっています。宗教的な要素が様々な領域に拡散する中で、観光と宗教との境界はかつてほど明確なものでないことが窺えます。

Q 四国お遍路のお話し、大変興味深いです。今井先生のお話しでは、このような「聖地巡礼」は、現在「宗教」から離れて、アニメや映画のロケ地を巡る、そこで作中の1シーンを再現するという形に発展しているそうですね。

A (今井先生) 現実の世界でアニメの舞台を見つけていく作業は、地域(ローカル)の魅力を再発見することにも繋がります。地域のことは、そこに住んでいる人が最もよく知っている。それはもちろんなのですが、地域の文脈に則った解釈に縛られていることもしばしばでしょう。それに対してアニメ・ファンらは、地域のことは知らずとも、アニメに表象された場所に少なからぬ憧憬を持って地域を訪れます。アニメの「聖地巡礼」では一般的な観光よりも地域住民との接触が多くなされており、ファンは現地で地域の魅力を伝え聞いたり、逆にアニメにおける地域の描かれ方を現地の人に伝える。このことから、場所解釈がローカルな局面に留まらない展開を見せているように感じます。寺社などを中心として歴史に基づいたローカルな文脈というものは当然存在するわけですが、アニメ「聖地巡礼」を通じて注がれたまなざしが、地域に新たな文脈を創出していると思います。

Q 第1回【Salon de Glocal】を終えていかがですか。

A (阿部先生) 職員の方々から研究内容について直接アクションをもらうことや、職員の方々が日頃考えていることを伺う機会がないので、とても貴重な時間でした。業務上の必要なやり取りも大切ですが、より深い次元でお互いの問題意識を共有することによって、よりいっそう教員と職員と一緒に大学を作り上げてゆくことができると感じました。

(門田先生) 日頃学務的な仕事でしか関わりがない職員の方々や直接意見交換ができる場があるというのは貴重な経験であり、本学の職員の方々のレベルの高さ、視野の広さ、想像力や思考力に感銘を受けました。職員の方の中には日頃からもっと自分の考えや意見を述べたり、他の人と率直な意見交換をしたり、それを仕事に反映させていきたいという欲求がかなりあるのではないかとことです。それは仕事に直結する一種の知的欲求であり、そのようなモチベーションを窺えたことがすばらしい経験でしたが、同時に、部局によっては必ずしもそうした意見交換の機会が充分にあるわけではないのではないかと危惧しています。日常から職員の方々同士で率直な意見交換をするというのは通常業務が過多の状況ではなかなか容易ではないかもしれませんが、その素地は作っていった方が良くと思いますし、サロンを通じて円滑なコ

コミュニケーションのだしに教員をどんどん使っていくて頂ければと思います。

(今井先生) 普段は学生や近接分野の研究者を相手に講義や発表をしているので、他分野の先生方や職員の方に向けてお話をする貴重な機会を頂きました。聞けばこの企画は、職員側から立ち上げられたものであるとのこと。ともすると大



学職員と教員とは事務手続きでの関わりに終始し、多忙故に、教室内で行われている講義内容や、教員の研究活動に立ち入ることなく過ごしてしまいがちになるかと存じます。若輩の身にて憚られますが、寸暇を惜しんで教育・研究へのご理解を示す当企画につきまして、継続と、今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

Q 西原先生には、メンバーとしてプロジェクト全体に関わっていただいておりますが、スピーカーのお話を伺って、また、第1回【Salon de Glocal】を終えていかがですか。

A (西原先生)「西原さん、立教大学の職員たちは実に勉強熱心で、これは立教大学にとっての大変な財産ですよ。これは、本学の教育改革をいつも励ましてくださった寺崎昌男先生から頂戴したお言葉です。今回、若手の職員たちから、【Salon de Glocal】というプロジェクトへの参加をお誘いいただきました。教員なんか加わると、かえってやりにくいのではないかとも思いましたが、「グローバル」というブランドテーマが大変魅力的で、お邪魔させていただくことにしました。テーマは、「宗教をグローバルに紐解く」。何と大胆なタイトルでしょうか。内容は、実に面白かった。職員方の感想は不明だが、むしろその場にいた教員たちは、専門領域を越境しながら、議論を心から楽しみました。私自身、初めてお会いする先生方もおられましたが、ある意味で、職員が、教員・研究者を、新たなテーマのもとに、引き合わせてくれたとも言えると思います。立教大学には、誇るべき研究者、研究資源が存在していますが、ともすると学部・研究科という縦割りの仕組みの中で、それぞれの枠組みに埋没しがちです。【Salon de Glocal】というプロジェクトは、そうした資源を、職員のファシリテーションで、「横につなぐ」試みです。ここから、深いレベルでの「教職協働」が生まれるような予感がしています。

*

いかがだろうか。スピーカーの話題には、身近な例も少し難易度が高い理念的な話もある。参加者の中には、少し理解が及ばなかった方もいたかもしれない。ただ、今回、



初めての試みであったにもかかわらず、定員を上回る方にご参加いただき、日頃、ともに働く教員同士、職員同士、教職員相互の交流のニーズがあると痛感した。西原先生の言葉をお借りすれば、教員同士を「横につなぐ」きっかけにもなった。【Salon de Glocal】のような企画は、学術研究の最先端で活躍する教員と各部署の状況を理解する職員が共に働く「大学」という組織でしかできない。また、「グローバル」という異文化や多様性を理解するという視点も、キリスト教に基づく教育や学生支援に力を入れてきた本学の精神的背景を継承するものであり、本学でしかできない取り組みであると考えている。

さて、映画「pk」の終盤では、神と通信できると称し、市民に多額の金銭を要求する新興宗教の指導者が登場する。それを不思議に思ったpkは、それが「ロングナンバー（かけ間違い）」だと訴える。その通信は、本当に神様につながっているのか。

彼には、いわゆる「常識」が通用せず、出会う人に「なぜか」「本当にそうなのか」と質問攻めにする場面が描かれる。私には（おそらくこの映画にも）、何人の信仰も疑う意図はない。また、特定の宗教や、宗教そのものについて疑問を呈する意図もない。

ただ、隣に座っている職員や毎日事務室に顔を出してくれる先生が、立教の未来像について、今世界で話題になっているトピックについて、どう考えているのか話す機会が十分にあるだろうか。所属の異なる教員同士、部署の異なる職員同士、教員と職員は、異なる立場ではあるが、「チーム立教」であり、相互理解が不可欠である。

【Salon de Glocal】は、立場やバックグラウンドの違い、常識という壁を破り、それぞれの価値観に揺さぶりをかける機会を提供するものである。積極的に利用していただくことで、新たな視点が生まれるのではないかと。相互に理解しあうことで「なんとなく怖い」という漠然とした不安を解消したり、共有したりできるのではないかと。ここはそんな教職員のよりどころとなりうるし、少なくとも私にとってはそういう場である。正しいこたえに導いてくれる「神様」はいなくとも、共にこたえを創造することができる。「知らなかったこと」を「知っているつもりだった人」と理解、共有したその先に、新たな「立教」が姿を現すと信じている。